

## 第141回秋期大会後記

## Report of the 141th Conference of the Japan Institute of Light Metals

中山 栄浩

Yoshihiro NAKAYAMA

令和3年11月13日(土)および14日(日)の2日間にわたり第141回秋期大会が開催された。直近の新型コロナウイルス(COVID-19)の感染状況は落ち着きを見せていたが、「幸せを創る」という本学会キャッチフレーズのもと、会員の感染防止ならびに参加しやすい環境を整えるために、5月の理事会においてオンライン開催となった。軽金属学会は本年度創立70周年をむかえ、この記念すべき年に軽金属学会としては初めて山梨で講演大会が開催される予定であったが、山梨に足をお運びいただくことができず、残念な結果となった。

第141回秋期大会では、500名の方に参加いただく中で、205件(口頭発表134件、ポスター発表71件)の研究発表が行われた。今回で3回連続となるオンライン開催で、大きなトラブルもなく無事に2日間の日程を終えることができた。アルバイト学生が講演会場のお世話を担当(会場係)させていただいたが(図1)、オンライン形式に慣れたこともあり、発表に先立つマイクテストや発表資料の共有確認もスムーズに行われた。くわえてネットサーフィンのように5つの講演会場をスムーズに移動する聴講者が多く見られたように感じられた点が、今大会の特徴のひとつであったように感じた。

大会初日の会長挨拶では、熊井会長から軽金属学会の方針についてご説明があった。会長自ら作成したパネルを用いて、軽金属の「軽」にさまざまな思いを込める中で、「軽金属」、「型金属」、「景(観)金属」から始まり「慶金属」に至るまで、社会に対して本学会が果たすべき役割をわかりやすく丁寧に解説いただいた(図2)。

今回の大会でも、軽金属躍進賞や軽金属奨励賞の受賞講演を含む一般講演、ポスターセッション、男女共同参画セッ



図1 会場係(音漏れやコロナ感染防止のため十分な距離を確保)



図2 自作パネルを用いた熊井会長のご挨拶

ション、企業研究会、機器・カタログ展示、女性会員の会、若手会員の会およびオンライン懇親会など、多くのイベントを開催することができた。

男女共同参画セッション「企業で活躍する博士」では、70名にも達する聴講者に参加いただく中で、澤谷拓馬氏(三菱アルミニウム株式会社)ならびに竹田聡氏(日本軽金属株式会社)より、これまでの経験に基づいた興味深いお話を聞かせていただくことができた。博士課程進学の経緯や動機、博士課程における研究活動、就職活動の心得や実態、さらには就職後の仕事内容についても懇切丁寧なお話をいただいた。博士課程への進学に迷っている学生さんの背中を押してくれることを心から願っている。

ポスターセッションはzoomのブレイクアウトルーム機能を活用して2部制で行われた。学生の熱意あふれる発表が印象的で、質疑応答も盛り上がり、また適宜説明資料を追加提示するなどオンラインの特徴を活かしたスマートなポスターセッションであったように思われた。受賞された11名の講演発表者に、心よりお喜びを申し上げる。なおポスターセッション②の終盤10分をむかえたところで、ブレイクアウト

ルームへの出入りに不具合が生じてしまった。直ちに関係者で意見交換を行い早期の回復に努めたが、結果として終了時刻までに復旧することができなかった。オンライン環境に慣れてきたように自負していたが、依然として想定外のトラブルが生じる可能性が避けられないことを改めて痛感する出来事となった。ポスターセッションに参加いただいていた講演発表者、聴講者ならびに審査委員の皆さまに深くお詫び申し上げます。

初開催となる軽金属奨学会「特別奨学生セッション」では、軽金属奨学会の特別奨学生に採用されている5名の博士課程学生から、最新の研究成果が発表された。最大で91名の聴講者に参加いただく中で、細部にわたって本質的で深い議論が行われた。今回は3名の女性発表者がおりましたが、決して臆することなく堂々とかつ自信に満ちあふれた研究発表ならびに質疑応答がとても印象に残った。この分野における更なる女性活躍が確信できる良い機会となった。発表時間は20分で一般講演相当であったが、引き続いて20分の十分な時間をとり充実した意見交換ならびに細部にわたる質疑応答が行われた。時には、議論が白熱し回答に窮する場面も見られ、さながら指導教員による研究室ゼミのように感じられることもあったが、全国各地におられる著名な先生方や研究者から直接ご指導をいただける大変良い機会であったと思われる。くわえて発表者相互の質疑応答が活発であったことにも大変感心した。一般の講演発表と異なるこの特徴的な機会が今後も継続されることを願うとともに、発表いただいた特別奨学生の皆さんには、是非、今後の成長に繋げていただきたいと思います。

オンライン懇親会には最大で85名の方に参加いただいた。手前味噌となるが、事前にワインを取り寄せグラスを片手にオンライン参加いただく「ワインを嗜む」企画(図3)では、60名のご参加をいただく中で、奥田教授(山梨大学ワイン科学研究センター長)からワインに関わる興味深いご講演があった。講演後にはたくさんのご質問をいただき、活発な質疑応答ができたことを大変ありがたく思う。懇親会の終盤では、次回第142回春期大会を担当される荒木実行委員長(大

**ワインを嗜む**  
～ワインを科学しましょう～

オンライン懇親会イベント

11 sat 13  
19:00 - 19:30

今回のワイン

●山梨4大  
ワイナリー  
めぐり

- ・ルミエール
- ・アルプスワイン
- ・白百合醸造
- ・蒼龍葡萄酒

の造った県産ワイン  
飲み比べセット。

講師のご紹介

**奥田 徹** 教授  
山梨大学大学院総合研究部  
生命環境学域長  
山梨大学ワイン科学研究センター長  
公益財団法人日本醸造協会理事  
日本ブドウ・ワイン学会元事務局長

「ワインは美味しく、酔えれば良い」とお考えでしょうか？そうではありません。心身の健康などにも有益な渋山の効用を持つことが知られています。国内生産量が第一位である山梨産ワインの飲み比べをご体験いただく中で、ワインが持つ様々な効用について科学的な観点から解説いただく機会を企画いたしました。今回は、ワイン科学の第一人者である講師をお招きすることができました。貴重な機会ですので、奮ってご参加ください。

図3 ワインを嗜む(オンライン懇親会)

阪大学)から、懇親会は行わないもの大阪大学吹田キャンパスをメイン会場とした対面形式での開催を計画していることなど第142回大会の概要が説明された。

コロナ禍が過ぎ去り従来通りの対面形式での講演発表ならびに懇親会が開催されることを楽しみにしつつ、第141回秋期大会の概要報告を終わらせていただく。